移道中小説

備前式内社巡り

どっこい道中記

――中学からの親友、神社めぐりで人生を問う！？――

【登場人物】

- **岡本 悠馬（おかもと・ゆうま）**

岡山の大学に通う地元っ子。民俗学ゼミ所属。式内社研究が趣味で、徒歩での神社巡りにロマンを感じている。やや天然だが真面目。

- **田中 晴人（たなか・はると）**

東京の私大に通う歴史学科の学生。中高時代の親友で、岡本の誘いに応じて旅に参加。少々飄々としており、ツッコミ役。

岡山県（備前国）の式内社

①	美和神社（みわじんじゃ）	瀬戸内市長船町東須恵
②	片山日子神社（かたやまひこじんじゃ）	瀬戸内市長船町土師
③	安仁神社（あにじんじゃ）	岡山市東区西大寺一宮
④	鴨神社 三座（かもじんじゃ）	赤磐市仁堀西
⑤	宗形神社（むなかたじんじゃ）	赤磐市是里
⑥	石上布都魂神社（いそのかみふつみたまじんじゃ）	赤磐市石上
⑦	布勢神社（ふせじんじゃ）	赤磐市仁堀西
⑧	神根神社（こうねじんじゃ）	備前市吉永町神根

⑨大神神社四座（おおみわじんじゃ）	岡山市四御神字土師之森
⑩石門別神社（いわとわけじんじゃ）	岡山市北区奥田南町
⑪尾針神社（おはりじんじゃ）	岡山市北区京山
⑫天神社（てんじんしゃ）	岡山市北区三野本町
⑬伊勢神社（いせじんじゃ）	岡山市北区番町
⑭天計神社（てんけいじんじゃ）	岡山市北区中井町
⑮国神社（くにじんじゃ）	岡山市北区三門中町
⑯石門別神社（いわとわけじんじゃ）	岡山市北区大供表町
⑰尾治針名真若比女神社（おはりはりなまわかひめじんじゃ）	岡山市北区津島本町
⑱鴨神社（かもじんじゃ）	加賀郡吉備中央町
⑲宗形神社（むなかたじんじゃ）	岡山市北区大窪
⑳鴨神社（かもじんじゃ）	玉野市長尾
㉑田土浦坐神社（たつちうらにますじんじゃ）	倉敷市下津井田之浦

第一章「出発！長船駅の一社目、の巻」

新幹線に揺られた末、東京から岡山入りした晴人。改札を抜けた瞬間、そこには大荷物を背負った岡本の姿。

「はると～！おせぇなぁ。午前中に回らんと、神様がいなくなっちゃうぜ？」

「お前のその理論、仏滅の墓参り並みに謎なんだよな……」

二人はＪＲ赤穂線に揺られ、**長船駅**へと向かう。

最初の目的地は、東須恵の山の上に鎮座する――

美和神社（瀬戸内市長船町東須恵）

「いやあ、山の神社ってのは気持ちがええな！」

「見晴らしが良すぎて足がすくむんだけど……」

岡本の持参した『式内社巡拝報告』によれば、この神社はかつて広高八幡宮と呼ばれていたが、明治の御一新で“美和神社”に復古したものらしい。

「つまり、リブランディング成功の先駆者ってわけだな」

「いや、神社にマーケティング持ち込むなよ」

境内には「美和の井」と呼ばれる泉があり、ふたりはそこで顔を洗い清める。

「これで今日の運気はばっちりよ。おみくじ引かんでもいい」

「……つまり、すでに予算不足なんだな」

第二章「片山日子神社で大迷走、の巻」

美和神社をあとにして、次の目的地は徒歩圏――

だと思ったのだが……

「おーい、岡本！これ道合ってんのか！？」

「……多分な。なんたって“片山”って地名の“片山神社”だぞ。間違いないやろ」

（※一時間後）

「……おい、片山“稲荷”神社って書いてあるぞこれ」

「いや、日子神社やないんかい！」

ようやくたどり着いた片山日子神社は、古墳群の近くにひっそりと鎮座していた。

「ここ、もともと山の上にあったんやけど、後冷泉天皇の時代に下ろされたって記録があるんよ」

「お前、なんでそんなことまで覚えてるのに道に迷うんだ……」

境内の隅に残された小型の“御幡”を見つけたふたり。

「これは……吉備津彦神社の御田植祭と同じ形式やな。備前全体の神事の痕跡がここにも……」

「なるほど。つまり俺たちが汗だくでたどり着いたのは、“国史のど真ん中”ってことか」

次回予告：第三章「安仁神社と一宮騒動の巻」

“二宮”と呼ばれていた安仁神社が、なぜか“西大寺一宮”を名乗るようになった真相とは？

一宮と二宮の境界線を巡って、岡本が地元氏子さんと激論バトル！？

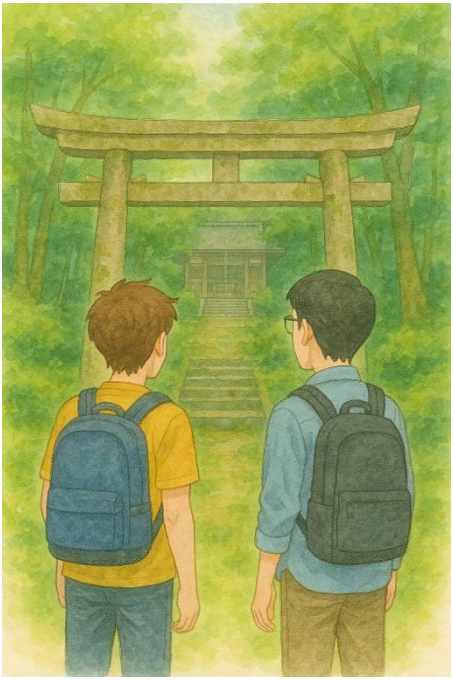
神職から聞き出した驚愕の真実とは――

第三章「安仁神社と“一宮”騒動の巻」

列車にゆられて西大寺へと着いたのは、午後も傾きはじめた頃。
ふたりが目指すのは、備前唯一の**名神大社**とされる――

🏮 安仁神社（岡山市東区西大寺一宮）

晴人がスマホを見ながら首をひねる。
「ここって、“一宮”って住所だけど……本当に一宮なのか？」
「ほら、『備前二宮』って言われとったけど、地元じゃ昔から“実質一宮”ってノリらしいで」
「なんだその“実質”って」
境内に入ると、神職の男性が境内整備の途中らしく、ほうきを片手に挨拶をしてくれた。
岡本、さっそく話しかける。
「すみません、ここって……ほんまは一宮なんですか？」
神職は微笑しながら答える。
「公式には吉備津彦神社が備前一宮ですが、うちは“名神大社”ですからね。格式では上なんですよ。
昔は“久方ノ宮”とも呼ばれた由緒ある社です」
「久方ノ宮……って、太陽の神みたいな名前ですね」
「ええ、実際、“アマテラスの荒魂”を祀ったとも言われてます」



「な、なるほど……（ふたりとも話が濃すぎる）」
境内の石段を登ると、社殿の前にある狛犬に晴人が目をとめる。
「なんか、ちょっとスマートな顔立ちしてるな……」
「たぶん江戸後期の備前焼やろ。この辺じゃ狛犬も焼き物や」
「岡山……奥が深い……」
――ふと気づくと、晴人の足元に猫が擦り寄っていた。
「こらこら……！お前、神社猫か？それとも……“ご祭神”の使いか？」
岡本が笑う。
「まさか“二宮の神”が猫に姿変えとるとかいう、まさかのファンタジー展開あるか？」
「だったら俺たち、もう完全に“旅ものライトノベル”だよ」

第四章（予告）
「鴨神社は三つある！？の巻」
赤磐に点在する三つの鴨神社。
神名帳の「三座」と現地の実数が一致するのは偶然か必然か。
三柱の神が導く“伝承のミステリーツアー”開幕！
岡本、ついに神社で寝転ぶ！？
第四章「鴨神社は三つある！？の巻」

安仁神社をあとにした二人は、一路、赤磐（あかいわ）市へ。
目指すのは『延喜式神名帳』にも記された**鴨神社三座**。
ところが岡本は、赤磐の神社マップを見てうなっていた。
「……おい、晴人。鴨神社、三つあんねんけど……全部“鴨神社”や」
「そりゃ“三座”って書いてるくらいだから三つで合ってるんじゃないの？」
「いや、どれがどの鴨なんか、わからへんねん……名前、ぜんぶ“鴨神社”」
「三人で同じ名前って、某歌謡グループじゃないんだからさ……」

⛩ 第一の鴨神社（赤磐市仁堀西）

「ここが仁堀（にぼり）の鴨神社やな。うちの地元じゃ“上鴨”って呼ばれとる」
境内は山懐に抱かれ、しんと静まり返っている。鳥居には古びた額。
「……でも、祭神の情報が少ないな」
「そやから論社って言われるんやろな。式内社でも、比定が決まってない場合は“論社”扱いや」
「大学で習ったやつだ。“式内社あるある”ってやつな」

⛩ 第二の鴨神社（加賀郡吉備中央町）

「今度は“中鴨”って呼ばれとる場所や。ここ、道中けっこう山道やったな……」
「まさか学生が自転車で来る場所じゃないと思う」

「でもな、ここの祭神は“鴨建角身命”や。これは古代の鴨氏祖神の代表格やから、正統感あるやろ？」
「たしかに本命っぽい……けど、まだもう一社あるんだよな」

⛩ 第三の鴨神社（玉野市長尾）

「最後が“下鴨”……って、名前じゃないけど位置的にはそうなる」
「三社全部“鴨神社”で、“上中下”に分かれてるのは、偶然なのか計画的なのか……」
「いや、もしかしてこれ、備前版“三鴨大連携”やないか？」
「なにそのポケモンみたいな言い方」
岡本は、三社をまわった地図を手にしながら、空を見上げて言った。
「晴人。三座って、ただ“数”やないんよな。
もしかしたら、地形とか、領地とか、祭祀の分担とか……そういう“秩序”を表しとるのかもしれへん」
「なるほど、まさに神々の“配置”ってことか」
「なあ晴人。俺たち、今“神の地政学”を歩いとるんちゃうか？」
「たしかに、山奥のバス停で気づくセリフじゃないけど……言ってることは正しいかもな」

第五章（予告）

「宗形と石上、武と魂の社、の巻」

赤磐の山中に潜む謎の二社。
宗形神社と石上布都魂神社――
それは“海”と“剣”、二つの文明の祈りが交差する場所だった！
次回、悠馬が神社で剣舞を始める！？

第五章「宗形と石上、武と魂の社、の巻」

赤磐市の奥、山間の道をバスで揺られながら、ふたりは次なる目的地を目指していた。

⛩ 宗形神社（赤磐市是里）

⛩ 石上布都魂神社（赤磐市石上）

「宗形……って、“むなかた”って読むの？」

「そうそう。九州の宗像三女神と同じ字やけど、ここはちょっと由緒が違うんや」

「まーた神社名だけでこんがらがるやつだな」

⛩ 宗形神社 ― 海の民の記憶

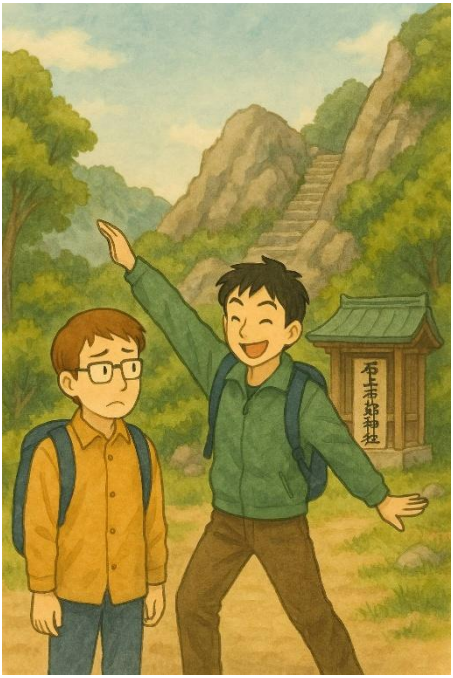
「是里（これさと）って、すごい名前やな……でもここ、海ないやろ？」

「実はな、“海から上がった神”の痕跡をたどって、ここまで来たって説もあるらしいで」

「え、それもう“出張宗像”じゃないか……」

神社の奥に進むと、深い森の中にしんと佇む本殿があった。

「“宗形”っていう名前は、“神の渡来を祀る”って意味もあるんよ」



「なるほど。航海守護というより、“魂の着陸地点”か」
「たとえるなら、ここは“海民の精神的な港”やな」

⛩ 石上布都魂神社 ― 武の剣、魂の社

続いて訪れたのは、赤磐市石上の山の中。
岡本は息を切らしながら山道を登る。
「……はあっ、まじでこれ“剣の試練”やん……」
「この坂道こそが、魂を試す道なんだよきっと……！」
到着した石上布都魂神社は、まさに岩山の奥。
祭神は**素戔嗚尊がヤマタノオロチを倒した剣、布都御魂（ふつのみたま）**を祀る。
「これは……武神の社。まさに“武の魂”を鎮める場所やな」
「……あっ。悠馬、何やってんの？」
岡本は、拝殿前で手を広げ、剣舞のような動きをしていた。
「今の俺の中に……布都魂が宿っとる！」
「中二病こじらせた歴史オタクにしか見えないけどな……」

🔍 小説内挿話：これぞ論社問題！

休憩所のベンチで、おにぎりを頬張りながら晴人がぼやく。
「しかし、この“論社”って概念、やっかいだな」
岡本が熱く語り出す。

「論社ってのはな、式内社が記された神名帳に名前はあるけど、どの場所にあったか分からんようになってもうて、複数の神社が『ウチが本家や！』って名乗っとる状態なんや」
「つまり、式内社界の“お家騒動”ってことか」
「そや。“正統を争う”ってより、“地域の記憶を守る”って感じやな。地元ではそれぞれ、ちゃんと信仰されとるし」
「……てことは、答えを決めることより、“全部見て歩くこと”に意味があるんだな」
「それや。旅してわかる、論社の尊さよ」

第六章（予告）

「石門別神社と岡山の都の記憶、の巻」

都市の中に埋もれた古社。
平安から現代へと続く、神と人のすれ違い。
石門別の名に隠された“門”とは何か？
ついに晴人、街中で“神隠し”に遭う！？

第六章「石門別神社と岡山の都の記憶、の巻」

岡山市の中心部に戻ってきた二人。
訪れたのは、**石門別神社（岡山市北区奥田南町）**。
「ここ、地図で見ると普通の住宅地にあるんだけど……本当に式内社？」

「これがな、都の記憶を引き継いどる不思議な社なんよ。門を司る〝神の分岐点〟とも言える場所や」
鳥居をくぐると、まるで都市の喧騒が一瞬止まるような静けさ。
ビルと住宅の隙間に、こぢんまりとした神域がぽっかりと口を開けていた。
「こういうの……いいな。街のなかに〝忘れられない場所〟があるって」
「ここは、物語の〝はざま〟なんやと思う。現代と古代の境界線」
晴人がぽつりとつぶやく。
「門があるから、人が越える。越えるたび、何かが変わる。
……俺たちの旅も、そういうもんかもな」

第七章「尾針と天計、響き合う神々、の巻」

次にふたりが向かったのは、ふたつの神社。

⛩尾針神社（岡山市北区京山）

⛩天計神社（岡山市北区中井町）

「〝尾針〟って珍しい名前やな」
「〝針〟っていう字がつく神社って少ないよな。灸や医療との関係あるのかも」
尾針神社の社殿は、静かに木々に囲まれていた。
一方、天計神社はこじんまりとしていたが、名の響きが印象的だった。
「〝天をはかる〟って、すごい神名だよな。古代の暦とか天文に関係あるんじゃない？」
「岡山の神社って、〝大きな力〟をもった名前が多いんよな。地味だけど深い」

第八章「国神と伊勢、都のはざまで、の巻」

岡山市内の終盤戦。

⛩ 国神社（岡山市北区三門中町）

こぢんまりとした社殿と、樹齢を感じさせる木々に囲まれた境内。

鳥居越しに見える岡山の町並みと旭川の流れが、“過去と今”の交差点を思わせる静けさを湛えている。境内には石碑や小祠も点在し、地域住民の信仰の痕跡が今も色濃い。「国神」という社名は全国的にも珍しく、古代の“地霊信仰”の痕跡とされる。“国”が神であり、“土地”が祈りの対象だった古代日本において、国神社はまさに「地を守る神」の象徴。『延喜式』のなかでも“御野郡唯一の式内社”として記録されるなど、重要な位置づけにある。

「〝国〟ってさ、今じゃ政治の単位だけど……昔は〝神がいる場所〟だったんだな」

「うん。人と神が一緒に暮らしとった。〝都〟って、ただの都市やなくて、〝信仰の交差点〟やった」

⛩ 伊勢神社（岡山市北区番町）

「伊勢って、三重じゃないの？」と晴人が言った。

「たしかに本家はそうじゃけどな」と悠馬は笑った。「ここにも“伊勢”を名乗る神社があるんよ。延喜式にも記録されとる、れっきとした式内社

じゃ」ふたりの視線の先に、小さな鳥居が現れた。周囲は住宅地。社殿は杉の木陰にひっそりと佇んでいた。
「意外と地味だな」
「でも、江戸の頃には、境内が今の岡山駅のあたりまで広がっとったんよ」
「えっ、マジで？」
「マジ。池田の殿様がこの神社を厚く信仰して、整備しとったらしい」
晴人は鳥居の前で立ち止まった。
「ここ、倭姫命が巡幸したっていう伝承もあるよな」
「そう。伊勢の神をただ“真似た”んじゃなくて、“迎えた”んじゃと思う」
「それって、都とつながることで、自分たちの国に“意味”を持たせたかったってことか」
拝殿に手を合わせたふたりは、ふと視線を交わした。
「伊勢の神を、この地で祀る。それは〝模倣〟じゃない。連結だ」
「うん。ここに生きる人たちが、都の記憶を、自分たちの時間に重ねたんだな」
国神社は〝国そのもの〟を祀るような名。
伊勢神社は、どこか懐かしい穏やかな雰囲気だった。
「……ここで俺、東京に帰ったら何になるんだろうな」
「晴人。それが旅の効能やで。〝自分の国〟を考えることが、〝他人の国〟を知る第一歩や」

第九章「田土浦坐神社、海の彼方へ、の巻」

旅の最終地点。瀬戸内海に臨む—

⛩ 田土浦坐神社（倉敷市下津井）

「……うわあ、海や！」

「〝海神の社〟って感じするやろ？ここは〝浦坐（うらにいます）〟って読むんや」

社殿の背後に広がる青い海。

海風に吹かれながら、ふたりはしばらく黙って立ち尽くす。

「なあ悠馬。俺たち、来る前よりちょっとだけ……大人になった気がするよ」

「ほな、証拠に絵馬でも書いとくか。

〝令和の膝栗毛、ここに至る〟ってな」

最終章「そして東京と岡山に戻る、の巻」

帰りの新幹線、車窓を流れる風景。

静かに目を閉じる晴人の隣で、岡本が小さくつぶやく。

「なあ。俺たち、また旅しようや。論社の続きを、今度は備中とか美作で」

「……お前が論社なら、俺は〝浪社（ろうしゃ）〟かな。放浪する社オタクとして」

「それええな。タイトルも決まったやん。

次は――《浪社巡拝記》で！」

ふたりの珍道中は、終わらない。

🎉エピローグ：神と歩くということ

旅の途中、神社で語り合った無数の言葉と沈黙。
それは〝神を探す〟のではなく、〝神とともに在る〟という
体験だった。令和の若者たちが歩いた道は、
千年以上前に祈られた神々の記憶と、
これからの時代に祈られる〝未来〟をつないでいた。

全国神社めぐり
スマホアプリ　式内社編

「備前岡山式内社巡り」と検索 するか、 QR コードを読込んでください。

android

iphone

その他のアプリ
神宮 125 社外宮編・神宮 125 社内宮編
神宮 125 社二見編他はこちらから
⇦